
ilish

梨

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

illish

【Nコード】

N5382BA

【作者名】

黎

【あらすじ】

最後の方はグロになる予定です。

絶望と再生、そして再びの死モノをモチーフに執筆中です。

最近死にモノがおおくなってきました。

ブローグ

手当たり次第に触れるものを壊していた。

手当たり次第、触れたものは壊れたから。

壊そうとしてもしなくても、どちらにせよ大事なものが壊れた。

昔は自分が呪われているんだと思っていた。自分を守るための言い訳だったんだろうけど、それに気づく度にまた壊れる。自分の弱さに気づくのが怖くて、周りを傷つけた。

壊れるなら壊してしまえ、と。

そんな俺が、今、郁理を守りたいと思っている。

夏の屋台とか、何かを焼いたような匂いから、俺は何故かいつも秋を連想する。

土や葉の薫りが煙たさと絡み合う。この空気は必ず俺に璃夕を思わすものだ。傷口に沁みるように、見るたびにアイツの泣き顔と郁理の無表情な顔が交錯する。

歩く先に広がる、茶や赤。ときどき黄色が覗くその風景は、アイツと出会った頃に酷く似ていた。

俺は郁理の手を引きながら、僅かにある隙間を歩いていた。小さい手が、離すまじと俺の手を握っている。

…表情と行動が矛盾している。そんなところもアイツに似ている。そう思うあたり、俺はアイツのことが忘れられないのだろう。

そんな俺が、今、郁理を守ると決心している。

noisy concrete

例えば、今、目の前にネコの死体があったとして。それについて
思案したとして、俺には何の感情も沸き上がってこない。

感情が欠落していると言われればしているのかもしれないが、俺
には喜びも悲しみも感じるあたり、そうとは言わなさそうだ。

じゃあ何故、俺はただ、その死体を見下ろすだけなのかというと、
何もできないからだ。

俺がそこで何か手を加えたとして、状況は改善されない。触れた
ところで、周りの人間はウイルスだのなんの言われて鬱陶しいだけ
だ。

要約しよう。理由としては、俺に何かしらの利益は無いから、だ。
俺が思うに、人は事柄から情報を得、利益と称している。

それはつまり、俺はネコの死体から何も得られないと思った、と
いうことだろう。

「さわっていい？」

「ダメだよ」

郁理は頷いて、しゃがんで猫の毛並みを眺める。

灰色のコンクリートに横たわる力無い軀。その瞳の色はわからな
い。

この猫は死の間際、何を見ていたのか。

この猫の世界は、どんな色をしていたのか。

唐突に郁理が呟いた。

「ねこ」

「ん？」

「寒そう」

端的に続けた後、今度は顔を見つめ始めた。

「…そうだね」

もう雪の季節だ。真昼にしても、暖かいとは言い難い。

首元を覆うマフラーを巻き直す。数秒冷たい空気に晒されたが、何故か心地よかった。

白は好きではない。寧ろ嫌いだ。

だけど、今までマフラーを買い換えたことがない。何もしないままずっと使っている。

初めに見たときは雪のように白かったのだが、もう色褪せている。今日も今日とて、郁理は無表情である。だが興味の範囲は知れず、こういったこともよくあることだ。

物珍しいのかそうではないのか。

郁理は結局30分もしゃがみ込み、やっと立ち上がったと思ったら、俺が持っていた花をねだり、亡骸の横に供えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5382ba/>

illish

2012年1月14日21時52分発行